

4 治水・利水で讃岐を救った先覚者 西島八兵衛

1. 西島八兵衛というひと

西島八兵衛は慶長元年(1596年)、遠江国(現在の静岡県西部)浜松で生まれた。父親は九郎兵衛といい、藤堂高虎に仕えていたが、病のために郷里の浜松へ帰っていた。十余年後高虎が江戸へ赴く途中、浜松の宿舎で西島父子と面談した時に、八兵衛を一目見てその才能を見抜き、すぐに主君の側に仕える近習役きんじゆやくを命じた。八兵衛が17歳の時であった。

藤堂高虎(1556年~1630年)は近江に生まれた武将で、豊臣秀吉に属して征韓の役で戦い、秀吉から大洲城(愛媛県大洲市)をもらい受けて大名となった。関ヶ原の戦い、大阪冬、夏の陣では徳川方に属して大きな功績を挙げ、後に伊賀(現在の三重県西部)、伊勢(現在の三重県中央部)の両国で32万3900石を領し、家康、秀忠の信任を得た。

八兵衛は高虎に従って、大阪の陣で、豊臣氏と戦い功績を挙げ、元和5年(1619年)徳川氏が京都二城城を築く際には、高虎の命により設計図を作り、同年大阪城を修築するときも見積書を提出して工事に参画した。八兵衛は歴戦の武人であると同時に、築城など土木工事に造詣が深い技術者でもあった。

2. 西島八兵衛の讃岐出向

讃岐国(現在の香川県)の三代目領主である生駒正俊は、藤堂高虎の娘を正室に迎えていたが、元和7年(1621年)病気により大阪で亡くなった。そのため、子の高俊が幼くして家督を継ぐことになり、外祖父である藤堂高虎と叔父の藤堂高次とが後見役となって助け、政務をみることになった。

藤堂高虎は常に生駒家の事態を憂い、幼い藩



西島八兵衛像

(写真提供: 三重県津市津・丸之内商店街振興組合)

主高俊の将来を案じ、自分の信頼する部下を生駒家に遣わした。その任にあたったのが当時、伊勢の島郡奉行として手腕を発揮し、立派な治績を挙げていた西島八兵衛である。

八兵衛は再び伊勢へ帰るまでの14年間生駒家のため、讃岐国の住民のために献身努力したが、その間の讃岐の情勢は決して安易なものではなかった。依然として藩政は振るわず、加えて相次ぐ天災のため五穀は実らず、生活に困窮した領民はやむを得ず他国へ移る者さえあった。

八兵衛は藩当局に進言して救急対策を講ずる一方、領民の生活安定を図るため、積極的に恒久的治水・利水施設を計画し、果敢にこれを遂行して地域の開発に精進した。

西島八兵衛が讃岐で手がけた開発事業は数多いが、代表的なものとしては、香東川こうとうのつけ替え工事と満濃池まんのうの改修がある。

3. 香東川つけ替え

香東川は阿波と讃岐の国境に水源があり、そこから北流し、瀬戸内海に注いでいる。また、香川県の名前の由来となった川である。

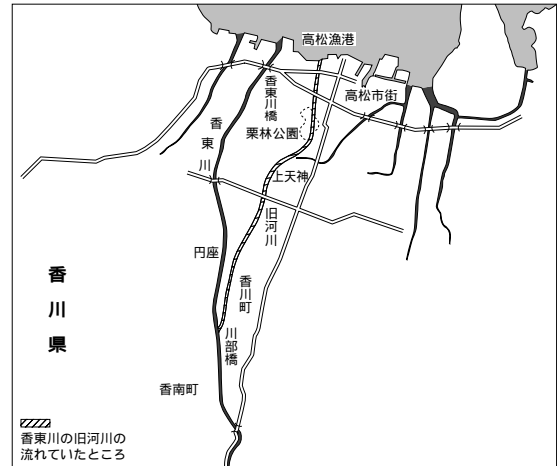
その香東川は今でこそ1本になって海に注いでいるが、昔は川筋が2本に分かれ、1本は現在の高松市内を貫流していた。年月が経つにつれて、上流から運ばれてくる土砂が堆積し、高松市内方面の川底は浅くなり、雨が降るたびに水かさが増した濁流が人家に浸水し、そのうえ満潮時になると、川の流れに乗った海水が押し寄せて地域住民を悩ました。しかも、雨が止めば数本の川筋だけが残し、一帯が河原となり砂漠と化してしまう。

讃岐に入った生駒親正が高松城築城の時にも、香東川の水害に悩まされ川筋をいくつか作って水害を防ごうと苦労した記録が残っており、一日も早く洪水をなくし、安心して生活を送ることが地域住民の切実な願いであった。このような時代に登場したのが西島八兵衛である。

香東川つけ替え工事の詳しい記録は残っていないが、古くからある自然の流れを人工的に堰き止め、今日のような機械設備のない時代に工事を完成した優れた技術には、大いに敬意を表すべきである。

工事は寛永8、9年（1631年、1632年）頃に始まり、寛永14年（1637年）頃に完成したのではないかとする説があるが、定かではない。

開発事業の成果を挙げる原動力が、開拓者の不屈の努力にあることはいまでもないが、これを助ける政治家などの援助と理解がその推進力となり、さらに、地域住民の開発に対する意欲と協力、この三位が一体となって初めて偉大な成果を挙げるができる。しかし、この時代は藩政は振るわず苦しい時代であったため、工事費も思うように賄えず、八兵衛は私費まで投じており、開拓事業を行うには厳しい時代であったといえる。



香東川の略図

しかし八兵衛は、屈することなく、あらゆる悪条件を克服して敢然と戦い通した。

4. 満濃池の改修

記録によると、寛永2年（1625年）に四国に大地震があり、翌年には、大暴風雨とその後の大干ばつのため、讃岐では餓死する者数しれずという状態であった。この惨状をみた藩主高俊は、西島八兵衛に命じ開田、干拓、治水、利水の一切の事業を託した。

八兵衛は領内を隅から隅まで詳しく視察し、適地を見つけては新たに溜池を築き、あるいはかさ上げして増築するなど、用水の確保に卓抜した手腕を発揮し、こんにち香川県下の著名な溜池のほとんどを手がけ、築いた数は90余りに上っている。こうして八兵衛は、溜池を作って灌漑の便を図るとともに、これによって洪水をなくすという防災的な一石二鳥の効果を持つ、いわゆる多目的ダムの築造を進めて地域住民の生産増進を図ったのである。中でも特筆すべきは、満濃池の改修である。

満濃池は、香川県仲多度郡まんのう町にある香川県で第一の大池である。

讃岐国は、大和時代から大和の都に近く、温暖な気候に恵まれて、比較的平坦な土地が多か

ったため、早くから土地が開け、これに必要な灌漑用水としての溜池の築造が行われていた。

大化二年（646年）に朝廷は開発事業を推進する通達を出しており、このような時代背景の中で満濃池は大宝年中（701年～703年）に讃岐国守である道守朝臣により築かれたと伝えられている。

こうして築かれた満濃池は、その後、弘仁9年（818年）に洪水のため堤防が決壊し、多くの田畑が流失した。朝廷は、弘仁11年（820年）より改修を始めたが、困難な工事であったために翌年になっても完成することができなかった。そのため、京都で高德をうたわれ、土木工事にも卓越した技術を持っていた空海が朝廷から派遣され、満濃池の改修工事を行うことになり、弘仁12年（821年）に復旧工事を終えることができた。

しかし、その後、戦乱の世が続き、土地開発の意欲はなくなり、産業は衰え、国内は次第に衰退していった。そのため復旧した満濃池も、たび重なる洪水で何度も決壊し、特に元暦元年（1184年）の大洪水による決壊以降は450年間も放置されたままになり、水は涸れて、ついに池の底に村までできてしまい、灌漑用水がないため農民の窮乏は極限に達していた。

こうした、廃絶のままになっていた満濃池を復旧したのが八兵衛である。改修工事にあたり、



満濃池

事前にち密な調査と周到な計画を立て、寛永5年（1628年）に着工し、3年有余の歳月と多くの労力を使って寛永8年（1631年）に完成した。この大工事の完成により恩恵を受けた村々は3郡44カ村の広範にわたり、収穫高でみると、当時の讃岐全体のおよそ6分の1にあたるものであった。

現在、高松の栗林公園にある商工奨励館の中庭に「大禹謨（だいうぼ）」と西島八兵衛が書いた石碑が置かれている。これは、八兵衛が香東川改修工事にあたり建てたもので、その後いつしか河底深く埋もれてしまっていたが、たまたま大正元年の、香東川氾濫に伴う修復工事の際、村民によって土中から掘り出されたものである。「禹」は4千年の昔、黄河の氾濫をおさめた中国の治水の大聖である。

八兵衛は「大禹」の「謨（はかりごと）」を理想とした偉大な土木技術者であり、また、優れた武人・文化人・行政家であった。



大禹謨の石碑

以上
(担当：黒川)

本編は、渡辺茂雄氏著「四国開発の先覚者とその偉業」(昭和39年～42年)四国電力(株)発行を原典に編集しています。